

陸平通信

OKADAIRA

2019年12月1日発行

編集・発行/茨城県稲敷郡美浦村土浦 2359

美浦村文化財センター (陸平研究所)

☎ 029-886-0291 FAX 029-886-0471

Eメール:bunkazai@vill.miho.lg.jp

第Ⅱ期 100号

陸平通信100号記念

～陸平貝塚特集～

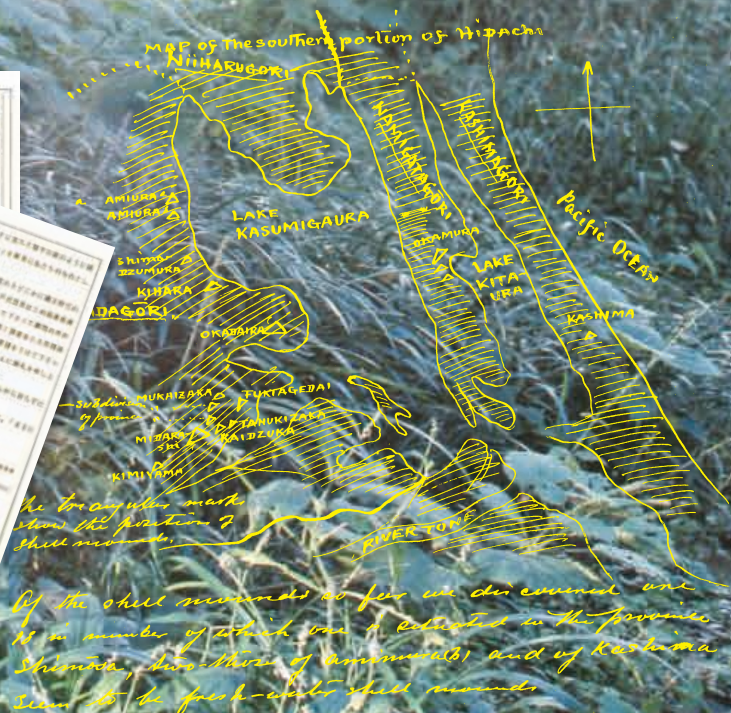


今年2019年は、5月に「平成」から「令和」に元号が改められ日本にとって大きな出来事がありました。陸平貝塚にとっても佐々木忠次郎と飯島魁の二人が初めて発掘調査をおこなった明治12 (1879) 年からちょうど140年という記念の年です。

陸平通信は昭和62 (1987) 年に創刊。調査活動を逐次公表する期間限定、手作りの広報紙でした。平成6年からは陸平貝塚を中心に村の文化財情報紙として発行し、今号で100号をむかえました。

そこで今号は陸平貝塚を特集する内容でお届けします。

陸平貝塚は美浦村安中地区に所在する縄文時代の貝塚遺跡で、平成10 (1998) 年9月11日国史跡に指定されました。



《おもな内容》

陸平貝塚発見前夜

— 佐々木忠次郎と大森貝塚 —

陸平貝塚確認調査の成果!

「発掘140周年」と「創刊100号」

陸平貝塚年表

企画展のお知らせ

P2～P3

P4～P5

P6

P7

P8

陸平貝塚発見前夜

— 佐々木忠次郎と大森貝塚 —

明治十二（一八七九）年七月。大学三年を修了した佐々木忠次郎（①）は、霞ヶ浦で淡水貝の標本を採集するため、湖の畔にある木原村（美浦村）へやってきます。そしてこの時、地元の人から貝がたくさん出るところはないかを尋ね、安中村（同）を探索し、そこにまるで雪が降り積もったように白く輝く広大な貝塚を発見します。はやる気持ちを抑え、佐々木はこの発見を師であるモースへ手紙で知らせます…

この貝塚こそ今では皆さんがよく知る「陸平貝塚」です。佐々木は、貝塚は古代の人たちが貝を食べ、その貝殻を捨てた場所であることを知っていました。つまり人が作り上げたもの—遺跡であることを理解していたのです。

動物学を学び始めて間もない佐々木が、どうして当時まだ普及していなかった考古学的な知識を得ることができたのか。これを知るためにはモースとの出会いから説き起こさなければなりません。

明治十年六月。アメリカの動物学者、エドワード・シルベスター・モースは、シャミセンガイなどの腕足類（②）の研究のため、その種類が豊富に生息している日本へやってきました。横浜に船で到着したモースは

数日後、採集・調査の許可を得るため、汽車で横浜から東京へ向かいます。明治五年に開業したばかりの横浜—新橋間の鉄道で、ちようど大森駅を過ぎた時、モースは進行方向左側の車窓から大森貝塚（品川区）を発見します。このエピソードは昔の教科書ではおなじみの話です。

紹介状を携え文部省顧問を訪ねたモースは、ここで意外な申し出を受けます。明治十年四月に創立されたばかりの東京大学の教授就任を打診されるのです。モースにとっては断る理由はありませんでした。なぜなら大学教授という立場で、臨海実験所を設け、来日目的であった腕足類の採集・研究の便宜を受けることが容易になったこと。さらに発見した大森貝塚の調査も大学の助力を得ることができるからです。実はモースは、日本に来たら貝塚の調査をやっ

※陸平貝塚発掘百四十周年企画展（令和二年一月二十五日—三月八日）では、モースや佐々木らが発掘した大森貝塚の出土品（国重要文化財）を展示する予定です。



さかいひろこ作画

調査を行っており、考古学的な研究も既に経験済みでした。そうしたモースの下に、最初の生徒として入学したのが佐々木です。

佐々木はモースとともに大森貝塚の発掘を行います。明治十年九月十六日の最初の予備調査から同年十二月月上旬まで、断続的に調査は行われました。この間、モースはアメリカでの講演会のため一時帰国します。モース不在の間、佐々木と彼の同級生、松浦佐用彦（③）が主となり調査を担任しました。モースが著

①佐々木忠次郎（ささきちゆうじろう）後の東京大学農学部教授。昆虫学・養蚕学等を専門。

②腕足類（わんそくゐい）。外見は二枚貝に似ているが、貝類と同じ軟体動物ではなく腕足動物に分類される。

③松浦佐用彦（まつうらさよひこ）。佐々木と共にモースの最初の教え子となった。高知県出身。モースに期待された俊才であったが、明治十一年七月に二十三歳の若さで病没。



明治天皇の展覧に供するための上申書 及び目録

上申書は文部大輔である田中不二麿の代理で神田孝平が太政大臣の三条実美に提出。この上申書に添付された「大森発見古物目録」は佐々木と松浦が作成している。国立公文書館デジタルアーカイブより



大森貝塚調査風景

線路沿いの切通の断面にあらわれた貝層（白い部分）を調査している様子が描かれている。

モース著「SHELL MOUNDS OF OMORI」より



E.S.モース

(明治11(1878)年撮影)

東京大学総合研究博物館蔵

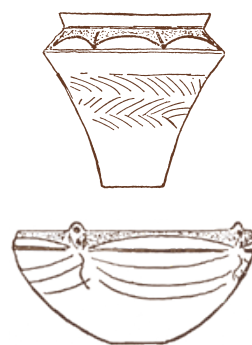


モースが描いた大森貝塚出土品の運搬風景

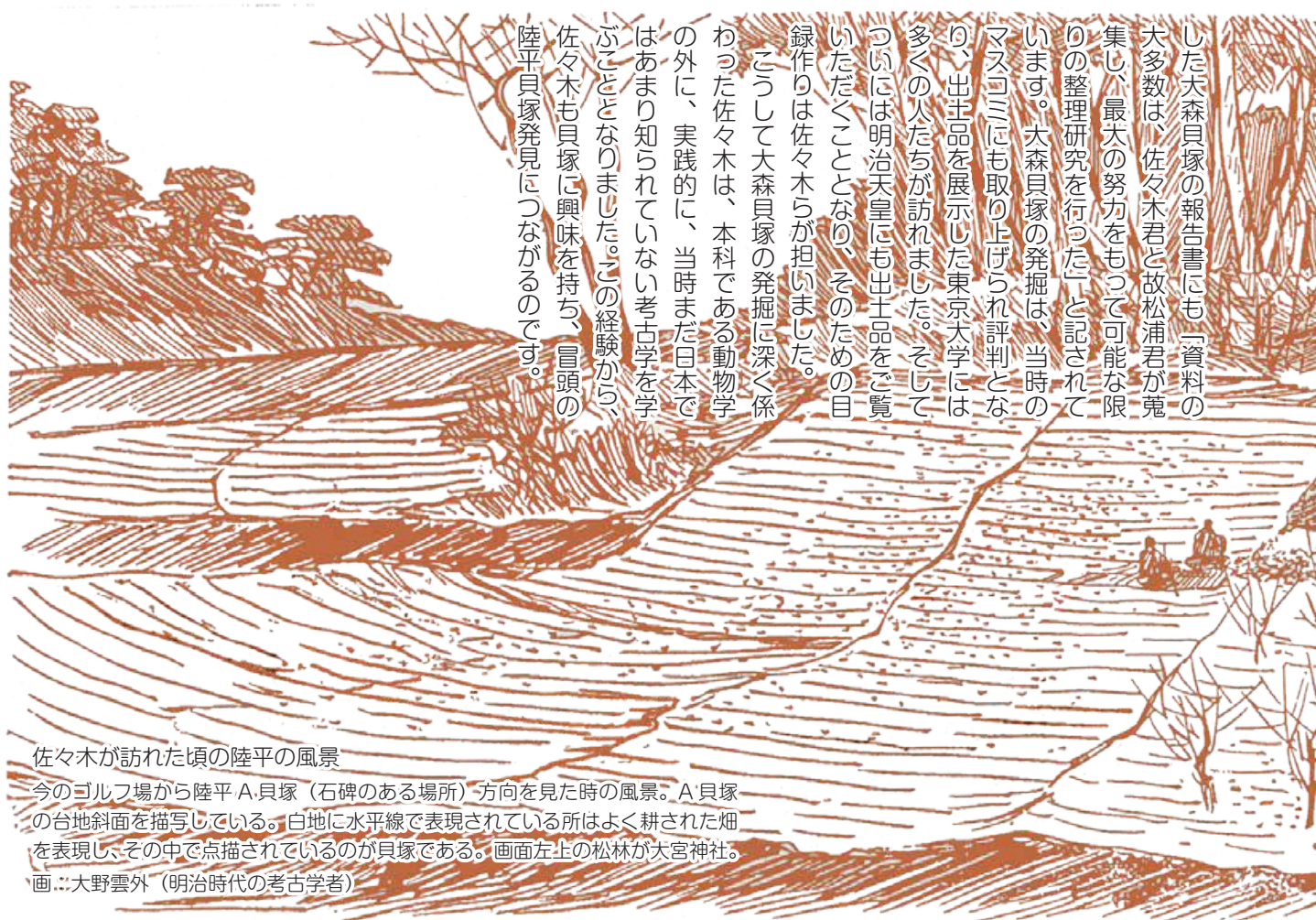
線路沿いを運ぶ大きな編みカゴは出土品で満ち、大事な出土品はモース自身が運んだ。

右はモースが描いた大森貝塚出土土器。

何れもモース著「JAPAN DAY BY DAY」より



てみたいとひそかに考えて
いました。アメリカにいる
頃、彼はいくつかの貝塚の



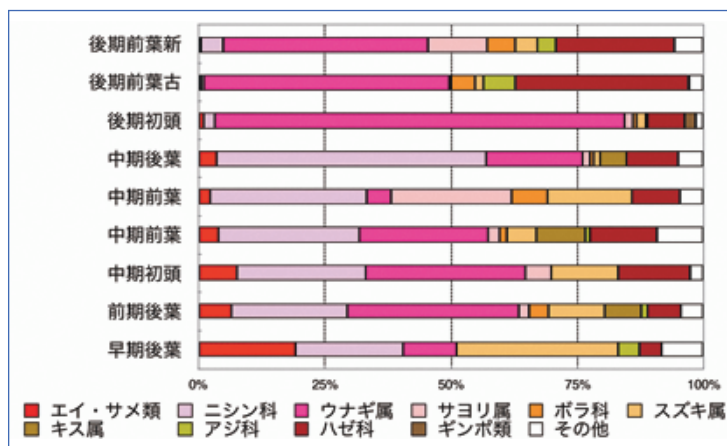
した大森貝塚の報告書にも「資料の
大多数は、佐々木君と故松浦君が蒐
集し、最大の努力をもつて可能な限
りの整理研究を行った」と記されて
います。大森貝塚の発掘は、当時の
マスコミにも取り上げられ評判とな
り、出土品を展示した東京大学には
多くの人たちが訪れました。そして
ついには明治天皇にも出土品をご覧
いただくこととなり、そのための目
録作りは佐々木らが担いました。
こうして大森貝塚の発掘に深く係
わった佐々木は、本科である動物学
の外に、実践的に、当時まだ日本で
はあまり知られていない考古学を学
ぶこととなりました。この経験から、
佐々木も貝塚に興味を持ち、冒頭の
陸平貝塚発見につながるのです。

佐々木が訪れた頃の陸平の風景

今のゴルフ場から陸平A貝塚（石碑のある場所）方向を見た時の風景。A貝塚の台地斜面を描写している。白地に水平線で表現されている所はよく耕された畑を表現し、その中で点描されているのが貝塚である。画面左上の松林が大宮神社。

画：大野雲外（明治時代の考古学者）

調査の成果！



小型の魚骨の検出割合



←調査された
貝塚の断面

↓貝塚から検出
されたウナギの骨



貝塚を調べる

陸平貝塚は縄文時代の早期～後期（約八〇〇〇～三五〇〇年前）にわたる長い期間、貝塚が残され続けた全国的にも珍しい遺跡です。貝塚は縄文人が採って食べていた貝や獣魚骨が捨てられたものなので、その種類を調べることによって、当時の食生活の移り変わりを知ることができます。分析の結果、陸平の縄文人は、当時海であった霞ヶ浦からハマグリを好んで採っていたこと、後期になるとウナギを大量に採って食べていたことがわかりました。

一八七九（明治十二）年の最初の発掘が行われて以来、陸平貝塚では断続的に調査がおこなわれてきましたが、まだまだその全体像はわかっていません。そこで、今後、陸平貝塚のより良い保存と活用を進めていく上で必要な情報を得るために、二〇〇八年度から一〇ヶ年にわたって確認調査を実施してきました。今回はその成果のいくつかをご紹介します。

人骨からも食生活がわかる

人骨の炭素と窒素の重量が違ふ原子の割合を分析することで、縄文人が何をどういう割合で食べていたかがわかります。陸平の縄文人は割とバランス良く、海の幸やドングリなどの山の幸を食べていたことが想定されました。

住民自らが郷土の歴史を

解明する！



現地での発掘調査は約二年ごとに計五行行われました（二〇〇八、二〇一〇、二〇一二、二〇一四、二〇一六年度）。これらの現地調査や整理・分析作業は、専門家の指導を受けながら、公募した地域住民の手によって行われました。現地での発掘は二週間程のものでしたが、事前の勉強会から事後の整理・分析作業まで含めると、一回の発掘につき約二年間をかけています。猛暑や雨の中、参加された皆さんには、力や知恵を合わせながら熱心に取り組んでいただきました。国指定の史跡における住民参加の発掘調査の試みは珍しく、自分たちの手で祖先の歴史を明らかにしていくことは、将来の郷土を考えていく上で大きな礎になるものと思われまます。

2008 ~
2018年度

陸平貝塚確認

地下レーダー探査

電磁波の反射を利用し、掘らないで地中の痕跡を調べる方法です。今回の調査でも試みましたが、床がしっかりつくられた古墳時代以降の住居跡には有効であることがわかりました。

こんなものも
出土しました！



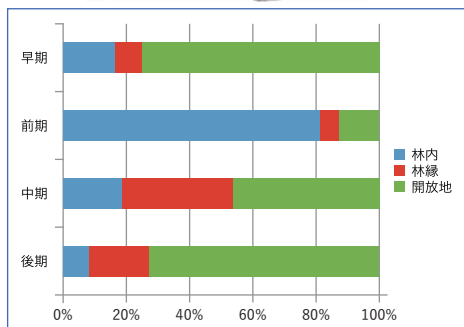
▲シカの骨角製のヤス



▲碧玉製小玉



▲ベンケイ貝製腕輪



微小カタツムリの組成変遷



▲ボーリングの様子

住まいの痕跡

大量の貝を残した陸平縄文人の住まいはどうだったのでしょうか？確認調査では各時期の住まいの跡を探りましたが、早・前期では家の跡は見つかりませんでした。一方、中・後期については、後期の家と思われるものが一軒発見されましたが、過去の調査事例を含めてもあまり多くないようです。陸平に貝塚を残した人々は陸平に住んでいた人だけではないのかもしれないかもしれません。新たな謎です。

昔の環境

縄文人が暮らしていた当時の地形や植生を知ることが重要です。地形については、人力によるボーリングを使った地層の調査により、陸平は今に比べて起伏が激しかったことがわかりました。また、貝塚に残っていた小さなカタツムリの殻を調べることで、当時の植生環境が推測できます。カタツムリ類は種類によって棲む場所が違うからです。陸平では前期に林が広がっていた状況が、中期以降、開けた環境になっていくことがわかりました。縄文人が徐々に林を切り開いていったものと思われます。

▶貝の種類を調べています
鑑定はプロ級になりました



▶発掘された縄文土器を専門家の指導のもと分類しています



▶発掘の様子



「発掘 140 周年」と「創刊 100 号」

市川 紀行

たまたま令和元年ということですが、今年は陸平縄文遺跡が科学的に発掘調査されて 140 周年になります。そしてその陸平縄文遺跡を中心に村内の歴史民俗等の情報を発信するということで発刊された「陸平通信」がちょうど 100 号を迎えます。

明治 12 (1879) 年、それに先立って東京品川の大森貝塚でアメリカ人モースの遺跡調査の指導を受けた東大生佐々木忠次郎と飯島魁が日本人だけで初めて科学的遺跡調査を行いました。そのために陸平貝塚は「日本考古学の発祥地・原点」とされ歴史に不動の位置を占めています。

その後 140 年、縄文のみならず全国で旧石器時代、弥生時代、古墳時代等々すべての時代論者は科学的調査検証に基づきます。その一番手が美浦陸平だったというのは愉快で誇らしく、「佐々木さんたちよくやってくれました」と感謝です。当時のふたりのすがたを示す文献、帰国したモースとのやり取りが文化財センターに展示してあります。見事な流れるような英文字体、陸平のスケッチ。陸平貝塚は「OKADAIRA SHELL MOUND」と呼ばれています。佐々木たちが調査地を選んだのですから、当時も貝殻がマウンド状に見えるくらいユニークな縄文遺跡だったのでしょう。ぜひ文化財センターの展示をご覧ください。

それにしても明治 12 (1879) 年、江戸時代から変わってただの 10 年あまり。歴史面に限らず当時の青年たちの学習意欲や研究能力のものすごい優秀さをいつも感じます。それが現代日本を創っていったのでしょう。

それから 100 年余の昭和 58 (1983) 年に 42 歳で私は美浦村長に選ばれましたが、時代の変遷の中でさしもの「考古学の発祥地」も荒れ果てた篠藪に被われ忘れられた存在になっていました。あるいは不動産的開発からは「邪魔者は消せ」という邪魔な存在でした。私はこの美浦にしかない「陸平」を美浦の宝物、安中の地域開発整備のシンボルにしたいと議会や関係地権者や住民の方々、研究者や理解あ

る企業とその「保存と活用」について協議相談を重ねました。曲折は略しますが理想的な状態で保存が決まり、平成 10 (1998) 年国指定史跡になりました。

佐々木たちの調査から 140 年、まさに「考古学発祥地」は国の宝物になったのです。佐々木たちが陸平に記念すべき一步を記してくれた絶大な影響力のお陰で、遺跡はいくつかの壊滅の危機を乗り越えたとも言えます。140 周年の今、改めて感謝する次第です。

「遺跡保存」が実現し国指定への流れの中で、それを支える住民のボランティア遺跡活用の創造的活動が始まります。先年 20 周年を迎えた「陸平をヨイショする会」です。この会の様々なソフト活動も国指定の大きな原動力になりました。そして様々な保存活動や研究成果、陸平での催しを村民各位に発信し理解の輪を広げてもらうためムラの広報紙として発刊されたのが「陸平通信」でした。今は陸平ばかりでなく村内の歴史民俗広報として幅広く話題を提供して親しまれています。よくぞ継続してくれました。今後とも次の 100 号を目指してください。改めて「陸平遺跡保存活用」の進展と関係者各位のご活躍ご健勝をお祈りいたします。

(元美浦村長・陸平をヨイショする会会長)



▲村で本格的に陸平貝塚の調査が始まった昭和 62 (1987) 年、陸平貝塚で調査の打合せの様子。右から 2 人目が市川紀行氏、中央は陸平貝塚の調査団長戸沢充則教授。

陸平貝塚年表

縄文時代 陸平の地にて縄文人が活動。貝塚を残す。

8000年前(早期) D貝塚つくられる

6000年前(前期) E貝塚つくられる

5000年前(中期) A・B・D・F・G・I貝塚つくられる

4000年前(後期) A・B・D・I貝塚つくられる

1877(明治10) E・S・モース、大森貝塚調査

1879(明治12) 佐々木忠次郎、霞ヶ浦を訪れ、陸平貝塚を発見(7月)/佐々木、飯島魁と陸平貝塚を発掘調査

1880(明治13) 「常陸陸平介墟報告」『学芸志林第6巻第31冊』

1883(明治16) 『OKADAIRA SHELL MOUND AT HITACHI』

1894(明治27) 八木英三郎・下村三四吉、縄文土器を“大森式”と“陸平式”とに細別

1896(明治29) 頃 大野雲外、陸平貝塚発掘調査

1904(明治37) 武田俊蔵、東京帝国大学に双口土器を寄贈

1907(明治40) 頃 江見水蔭、陸平貝塚発掘

1916(大正5) 頃 長原孝太郎「貝塚図」描く

1948(昭和23) 酒詰仲男(東京大学) 陸平貝塚発掘調査

1950(昭和25) 酒詰、日本考古学協会春季総会で陸平貝塚の調査について発表

1955(昭和30) 美浦村誕生

1968(昭和43) 明治大学考古学研究室が陸平貝塚測量調査

1973(昭和48) 陸平貝塚にレジャーセンターが計画され遺跡保存を求める運動おこる

1986(昭和61) 基本理念“保存と開発は並列同義”のもと「安中地区総合開発」、開発企業と協定書を締結/陸平貝塚保存対策協議会設置/『美浦村史研究』創刊号にて陸平貝塚を特集

1987(昭和62) 陸平調査会発足/陸平貝塚保存のための確認調査(～1990)/貝層範囲確認調査、地下レーダー探査、試掘確認調査、周辺地域や谷部のボーリング調査、分布調査/「陸平通信」(第I期)発行/ビデオ「よみがえる縄文ロマン」

1988(昭和63) 陸平周辺遺跡発掘調査(～1990)/陸平A貝塚保存範囲決定/A貝塚谷部試掘調査、谷部ボーリング調査

1989(平成元) 記録映画「わがふるさと美浦村 第1部 縄文人はよみがえる」

1990(平成2) 陸平貝塚保存範囲(約14ha)決定/川岸屋より壁画寄贈/博物館構想基本理念「動く博物館構想」の提示

1991(平成3) 陸平及び周辺地区動植物調査(～1994)

1993(平成5) 美浦ゴルフ倶楽部オープン、陸平基金設立

1994(平成6) 「陸平通信」(第II期)発行/「陸平貝塚からのメッセージ調査研究発表会」開催

1995(平成7) 陸平をヨイシヨする会発足/ハンズ・オン陸平事業展開/第1回陸平縄文ムラまつり

1996(平成8) 縄文人形リクル・タイラ

1997(平成9) 縄文太鼓保存会発足/第1回縄文の森コンサート/陸平A貝塚発掘調査/文化のまちづくりフォーラム「遺跡の保存と活用からの地域創造」開催、「陸平よはるかに」披露

1998(平成10) 陸平貝塚国史跡指定(9月11日、指定面積65192.34㎡)/陸平貝塚保存活用検討委員会発足

1999(平成11) 陸平貝塚石碑建立/国史跡記念コンサート「縄文から未来へ音の道」開催

2001(平成13) 陸平貝塚管理条例制定

2003(平成15) 東京大学所蔵陸平貝塚資料調査/竪穴住居復元(竪穴住居復元プロジェクト)

2004(平成16) 文化財センター開設/陸平をヨイシヨする会10周年記念式典開催・記念誌刊行

2006(平成18) 住民参加の陸平貝塚確認調査のための「陸平貝塚を皆で調べよう講座」開講

2008(平成20) 住民参加の陸平貝塚確認調査(D貝塚)/陸平をヨイシヨする会「藤森栄一賞」受賞/第23回国民文化祭いばらき2008として縄文フォーラム・コンサート開催

2010(平成22) 住民参加の陸平貝塚確認調査(D貝塚)

2012(平成24) 住民参加の陸平貝塚確認調査(D・E貝塚付近)

2013(平成25) 陸平縄文フォーラム'13開催、陸平発掘井レシビ開発

2014(平成26) 住民参加の陸平貝塚確認調査(B貝塚)

2015(平成27) 陸平貝塚の保存と活用を未来に繋ぐ記念碑建立/陸平をヨイシヨする会「和島誠一賞」受賞/小惑星に「Okadaira」の名がつけられる

2016(平成28) 住民参加の陸平貝塚確認調査実施(I貝塚)

2018(平成30) 陸平をヨイシヨする会20周年記念誌刊行/竪穴住居復元(竪穴住居復元プロジェクト)

2019(平成31/令和元)

佐々木・飯島の発掘調査から140年





企画展のおしらせ

陸平、明治と平成の調査風景

— 陸平貝塚発掘調査140年記念企画展 —

会期 令和2年1月25日(土)～3月8日(日)

会場 美浦村文化財センター 展示室

明治12年(1879)の佐々木忠次郎、飯島魁両名による記念すべき最初の陸平貝塚の発掘調査から今年でちょうど140年になります。二人が手掛けた発掘調査をまとめた報告書は、今も色あせることなく当時の調査成果を私たちに伝えてくれます。

江戸から明治へ。生活や文化が目まぐるしく変わってゆく時代の中で、モースの薫陶を受け、初めて考古学に触れた佐々木たち。彼らが残した業績をたどり、今の考古学に通底し、「日本考古学の原点」と呼ばれている所以を紹介します。

また佐々木・飯島の調査を正に継承し、陸平貝塚における縄文の人たちの暮らしを蘇らせようと、地域住民とともに取り組んだ近年の調査成果を紹介します。

記念行事

連続講演会 「陸平貝塚の調査成果と今後の展望」

- ① 2月2日(日)「貝・骨からみた陸平貝塚の暮らし」樋泉岳二氏(明治大学)
- ② 2月9日(日)「数mmの小さな貝が示す陸平貝塚の特徴」黒住耐二氏(千葉県立中央博物館)
- ③ 2月16日(日)「最新科学があきらかにした陸平縄文人の食生活」米田 穰氏(東京大学)
- ④ 3月1日(日)「陸平人の暮らしと社会」阿部芳郎氏(明治大学)

■ 会場：美浦村文化財センター

■ 時間：午後2時～午後3時30分

事前申し込み不要。当日直接文化財センターへお越しください。

近年の発掘調査からわかった最新の成果を専門家のみなさんが直接話してくれるヨ！



文化財センターからお知らせ

開館時間：午前9時～午後5時

企画展開催中の文化財センター休館日

1/27 ㊟、2/3 ㊟、2/10 ㊟、2/12 ㊟
2/17 ㊟、2/25 ㊟、3/2 ㊟

展示替えに伴う展示室休室日

12月28日(土)～1月24日(金)
3月10日(火)～3月27日(金)

お問合せ：美浦村文化財センター

茨城県稲敷郡美浦村土浦 2359 番地
電話 029(886)0291

陸平貝塚公園までの交通アクセス

【車】by car

常磐自動車道「桜土浦IC」より
国道125号バイパスで約40分
圏央道「稲敷」より15分

【バス】by bus

JR土浦駅より西口①バスのりば
木原経由江戸崎行き
「谷津入」下車 タクシーで約5分
または「大谷」下車 3.5km

